

藤樹先生座像制作と 現在の私の妄想

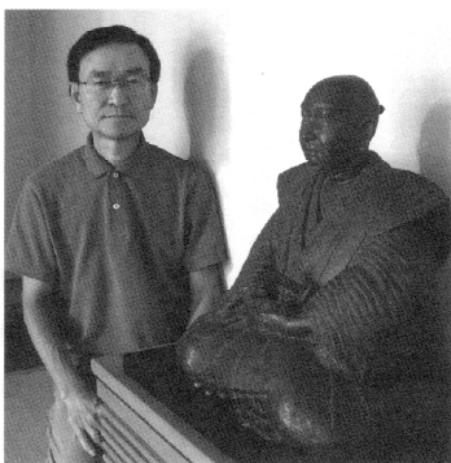
弘 部 誠

昭和五十四年、小生二十九歳の時、写真の藤樹先生座像を制作。動機については、以前「松下亀太郎先生追悼集」に寄稿しましたように、「近江の先覚者シリーズ7」の「特別展中江藤樹」開催時の県立琵琶湖文化館での松下亀太郎先生の講演を聴いたことが出発点でした。

次の年の昭和五十五年にブロンズ（銅）像として、藤樹書院に置かれることとなりました。もう三十四年前となります。

この像制作後、等身大の藤樹先生座像を作り始めましたが、別の土地へめの我が家が建て替えがあり、粘土原型の移動が困難で、やむなく壊すことになりました。幻の等身座像となってしまった。

けれども、行く行くは、藤樹先生の生涯における節となる場面のイメージを、彫刻として形象化したいと思っています。



当時、彫刻表現とともに考証した点は、書院蔵掛け軸の藤樹先生肖像は、絵画としての表現上、お顔の方に向と体の向きを変えてあり、それを

ます。
印象に残っている藤樹先生像は、もちろん玉林寺にある石本曉海氏作の木像、そして、彫刻家・森大造氏の木像（琵琶湖文化館所蔵）である。2つの作品とも、藤樹先生の真摯な人柄から発せられるエネルギーが感じられる名品です。完成度の点から、本庄小学校の石像もよいと思

シリーズ③ 「伝え継ぐ藤樹先生」

（藤樹書院だより）
藤樹先生のご命日に当たる九月二十五日（木）午後二時より、書院にて儒式祭典が執り行われます。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

さらに驚いたことに、和室には「致良知」の額が掲げられているとのこと……。

（次号）に続きます。二田村治夫

立体化のなかで全面的に正面向きに表現し直すこと。次に、江戸時代の中国絵画の影響による人物表現、例え、やや釣り目の表現を抑えること。また、先生が喘息の持病があることから、やや前かがみにするなどと。そして、刀を売つて酒を買い、商売をされたとのことから、刀をより短いものにするなどでした。

この像制作後、等身大

の藤樹先生座像を作り始めました。

この像制作後、